周辺部は藻体の密度が高い。コロニーの中心部が空洞をなすものもあり，日本のウツロマリモに似た状態を現す。各細胞はダ円形又はタイコ状，径 4-5 μ，長さは径と同長又は少しく長い。異形細胞は径 6-7 μ である。

将来日本でも発見の可能性があるかも知れない。大量に入手出来たら三杯酢か清汁にしたらオツなものであろう。後になって気がついたが，湖畔には臨湖生物実験所もあり，色々な標本も陳列されてある由であった。翌日イルクーツクからハバロフスクへ飛行機で飛んだが，バイカル湖を横断するのに僅か 2 分 45 秒であった。

□山田幸男博士 (1900—1975)

日本の藻類学界の重鎮として永い間活躍された山田幸男先生は病気加療中の処，去る 7 月 6 日京都の自宅において逝去された。享年 74 才であった。

山田幸男先生は明治 33 年（1900）に京都で出生され，幼時に東京に移任され，東京府立第一中学校，第一高等学校を経て，大正 13 年に東京帝国大学理学部植物学科を卒業，同学において副手を勤められた後に，北海道大学に新設された理学部教官として招聘され，昭和 5 年に任官，6 年から定年退官の昭和 39 年まで同学の理学部植物分類学講座の担任教授として，33 年の長きに亘り研究と教育に従事された。退官後は数年間札幌で研究を続けられたが，その後郷里の京都に帰られ，ここで多年の研究の集大成に専念されていた。

先生は藻学，とくに海藻の分類学の分野に多くの業績を残され，また多くの藻類研究者を養成されるとともに，日本藻類学会，国際藻類学会の創立に尽力され，さらにそれぞれの会の会長を歴任されるなど，昭和 10 年に岡村金太郎博士が亡くなられたあとの日本の藻学の指導者として，その発展に献身され，学界に大きな足跡を残された。「至誠」の語を座右の銘とされた山田先生は極めて誠実な人格者であり，内外の多くの方達から深く敬愛された。いま掛替のない先生を失ったことは誠に哀惜の念に堪えない。山田先生が学界に残された功績は大きく，いま詳しくこれを述べることは紙面が許さない。ここでは藻類，とくに海藻の分類学的研究の分野の足跡を辿り，先生を偲びたい。

先生の最初の研究は台湾の海藻についてであり，これは東京帝国大学の早田文蔵教授のもとで，岡村金太郎博士の指導を受けて行ったもので，卒業論文となった。その後先生が研究の対象とされた地域は台湾から千島に至る旧日本国の全土に及ぶが，どちらかと言うと南方の地域が多い。このことは先生の最初の研究と関係があるようにも思われる。南方地域の海藻フロラの研究として，前出の台湾（1925）の他に，台湾琉球嶼（1950），沖縄本島（1934），与那国（1938），ミクロネシアのアント環礁（1944），八丈島（1952, 1953, 1957）のそれなどがある。八丈島の海藻についてはいまだ断片的な報告の印刷のみとなっているが，本年 4 月に病床にお見舞した時の先生の話による

The late Dr. Yukio Yamada (1900-1975)

と，八丈島の海藻の研究はほぼ纒った形の原稿が出来ているとのことであった。上記の他に，海藻フロラの研究として，伊勢湾の菅島 (1950)，陸奥湾 (1928)，北海道渡島国小島 (1942)，厚岸 (1944)，知床半島 (1944)，中部千島のウルップ島 (1935) などを対象としたものがある。

先生はまた海藻のモノグラフ的な研究も精力的に進められた。最初に手がけられたのは紅藻ソゾ属 *Laurencia* (1931) の研究で，これは昭和3〜5年の外遊中に完成し，先生の学位論文となった。続いて，同じく紅藻のキリンサイ属 *Eucheuma* (1936)，コナハダ属 *Liagora* (1937, 1938)，ガラガラモドキ属 *Rhodopeltis* (1935)，緑藻のイワヅタ属 *Caulerpa* (1940, 1944)，サボテングサ属 *Halimeda* (1941, 1944) などの研究がある。モノグラフの研究対象となった上記5属の海藻はいずれも南方産のものである。一方，北方性のコンブ科植物にも大きな関心をよせられた (1934, '35, '38, '47, '48)。さらに山田先生は，遠藤吉三郎博士が日本産ヒバマタ科の研究 (1907) の中で扱われなかった南方産のホンダワラ属 *Sargassum* の研究にも力を注がれた。その成果の一部は本誌にも発表されている (1942, 1944)。このホンダワラ属の研究は先生のライフワークとして晩年まで続けられ，その成果の蓄積は膨大な量に及んでいる。しかし，個体による変異の幅が大きいこと，既知種の基準標本の大部分がヨーロッパにあること，しかも断片的な標本に基づいた記載が多いことなどから，先生はその研究の最終的な発表には慎重を期しておられたが，遂にその印刷を生前において見ることのできなかったことは実に残念である。

先生はまた Notes on some Japanese Algae, 1–10 (1930–1944) 及びその他の報文で，日本の海藻についての分類学上の新知見を多数報告されている。前記のフロラやモノグラフの研究も合わせると，山田先生が新属，新種，新変種，新品種として記載された分類群は200近くになる。さらに先生は海藻の分類には生活史の研究が必要であることを常々述べておられたが，この方面の業績も少くない。

以上述べた他に，先生が指導された門下生による海藻の研究も数多くあり，これらを合わせると，山田先生が海藻の分類学に貢献された業績は実に大きいものであったと言える。先生は岡村金太郎博士亡きあと，未だ研究の充分でない日本の海藻相を明らかにする責務を自らに課され，御自身及び門下生の研究成果はもとより，岡村博士の「日本海藻誌」発刊の後に明らかとなった日本の海藻についての知見を集大成し，これを「日本海藻誌」の増補版として出版する計画を樹てられ，退官後もその完成に専心しておられた。いまその出版を見ることなく去られたことは誠に残念であり，惜しみても余りあることと言わねばならない。 (黒木宗尚)